構成文化財の概要

❶紅花畑の景観

山形市　天童市　中山町　河北町　白鷹町

当地の紅花は「最上紅花」と呼ばれ、春先に畑に肥料をやり種を蒔くことから始まり、1輪が花開く「半夏一ツ咲き」から7月上旬になると、茎の先にアザミに似た鮮黄色の花をつける。トゲの多い紅花を摘むのは、朝霧がたなびいてトゲがしっとりと濡れて柔らかくなる明け方。最上川流域に紅花畑が多いのは、肥沃で水はけがよい土地であることや、朝霧の立ちやすい盆地性の気象条件が紅花の栽培に適しているからである。紅花畑の風景は古くから人々を魅了し、江戸中期の紀行文「東遊雑記（とうゆうざっき）」や松尾芭蕉の俳句を始め、近年ではアニメ映画「おもひでぽろぽろ」などでも紹介された。シーズンには、各地で紅花まつりが開催され、花摘み体験や撮影会などが行われる。

❷山寺（やまでら）

［国指定名勝史跡］

山形市

貞観2年（860年）12月、慈覚大師（円仁）が清和天皇の勅命を受けて建立した宝珠山立石寺を中心とする山寺は、全山が国の名勝史跡に指定されている。緑に覆われた中に、巨大な奇岩怪石がのぞく山容は四季折々の絶景を見せ、江戸時代には尾花沢の豪商「鈴木清風（せいふう）」の勧めで俳聖松尾芭蕉が弟子の曽良とともに訪れ1泊し、「閑さや岩にしみ入る蝉の声」の名句を「おくのほそ道」に残している。その「せみ塚」が山門からの1,000段を越す石段の途中にあり、山頂には奥の院と眺望の素晴らしい舞台造りの五大堂の他、開山堂や釈迦堂などがある。これらは山岳仏教としての天台宗の典型的な伽藍配置といわれる。また、境内の立石寺中堂にある比叡山から分灯された「不滅の法灯」が近江商人を惹きつけたことは、山形との紅花交易を大いに発展させた。「東北の霊場」といわれ人々の崇拝をあつめ、今もなお県内最大級の観光名所である。

❸立石寺中堂（りっしゃくじちゅうどう）

［国指定重要文化財・建造物］

山形市

延文元年（1365年）に初代山形城主斯波兼頼が建立、のちに慶長年間（17世紀初め）最上義光によって大修理された古刹である。ブナ材の建築物としては日本最古といわれ、正面に幅1間の向拝を持つ入母屋造で、内陣の須弥壇には鎌倉時代の一木彫の秘仏本尊薬師如来坐像（慈覚大師作、重要文化財）が安置されている。参拝者は、紅花交易を地元の商人とともに発展させた近江商人を惹きつけたという「不滅の法灯」を拝することができる。堂内奥深く静かに灯る法灯は、慈覚大師が本山の比叡山からもたらしたもので、比叡山の灯が織田信長による焼き討ちに遭って消えてしまった時、逆に比叡山に返して灯されたという逸話がある。芭蕉の蝉の句を綴った石碑は、中堂の左隣にあるので見逃さないように。

❹若松寺観音堂

［国指定重要文化財・建造物］

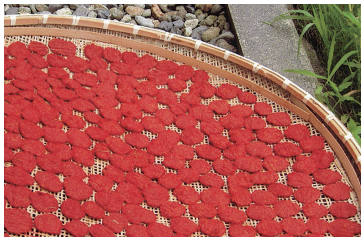
天童市

山形の代表的な民謡「花笠音頭」で「めでためでたの若松さまよ」と唄われる若松寺（天台宗）は、寺伝によれば和銅元年（708年）に行基によって創建され、平安時代に山寺を開いた慈覚大師（円仁）が山頂にあった御堂を現在の地に移したのがはじまりで、山寺よりも古い由緒を誇っている。本堂は立石寺とほぼ同じ桁行・梁間とも5間の柿型銅板葺きの入母屋造で、堂内には重要文化財の金銅聖観音像懸仏や板絵著色神馬図などが奉納されている。室町時代には最上三十三観音札所の第一番となり、江戸時代には門前の若松集落にも多くの坊舎があったという。近年ではすっかり「縁結びの観音様」としても親しまれ、毎年多数の巡礼者が訪れている。山深い高台の境内からは天童市街地を一望できる。

❺最上川

寒河江市　天童市　尾花沢市　中山町　河北町　大石田町　白鷹町

吾妻山を源流に、日本海まで県内を全長229㎞縦断して流れる母なる川で、日本三急流の一つ。水はけのいい肥沃な土地の流域には紅花の主要な産地が多く点在していたが、山越えの輸送で難渋を極めた。そこで活躍したのが最上川の舟運であったが、川床に岩場のある難所も多く随所で馬に積み替えていた。しかし最上義光の時代の大改修で難所が切り拓かれると最上川舟運が盛んになり、江戸時代には物資輸送の大動脈となった。各地で栽培された紅花や米などが小鵜飼船で大石田や左沢などの船着き場まで運ばれ、大型のひらた船に積み替えられ酒田へ運ばれた。寛文12年（1672年）、河村瑞賢による日本海の「西廻り航路」が確立、最上川の舟運は更に大きな役割を果たすこととなった。



❻紅餅の製作技術

山形市　天童市　中山町　河北町　白鷹町

紅花は、着物の染料や口紅の材料として京都や大阪に運ばれ山形の発展に大いに寄与した。そのためによく乾燥させ、薄い丸い紅餅にして船積みした。紅餅は摘み取った紅花をよく洗って黄色素を取り除き、鮮度を保つために直径3cm程の大きさに丸め筵の上に並べ乾燥させて作る。紅花に含まれる赤い色素はわずか1％で実に貴重なもの。山形産の紅花は「最上紅花」と呼ばれ品質の良い高級品として扱われ、製作技術は今も継承されている。他に、摘み取った紅花を団子状のまま干した「すり花」や、晴れ間の乾いた状態で摘み取って千切った花びらを干した「乱花」などの加工の形もある。様々な形に加工された紅花は染料のほか菓子や麺、お茶などの食品加工品や漢方薬として使用される。

知っておきたい基礎知識❶ 花笠の花は紅餅

毎年8月5日から7日に山形市で開催される夏の風物詩「花笠まつり」では、華やかな衣装をまとい花笠を手にした踊り子がメインストリートを彩り舞い踊る。祭りで踊り子が持つ「花笠」にあしらわれている赤い花は、実は紅花から作られた真っ赤な「紅餅」が、ざるに置かれて干されている様子を表現したものともいわれている。

⑩紅花屏風（べにばなびょうぶ）

［県指定有形文化財・絵画］

山形市

出羽国村山郡六田村（現山形県東根市）の庄屋の生まれで江戸末期に狩野派にも師事した絵師青山永耕が、「最上紅花」の名で知られた山形の特産品紅花の、栽培から出荷先の京都での取引までを描いた2隻の屏風絵。右隻には豊作を願う春祈願から種まきや花摘み、紅餅造りの作業工程の光景が描かれ、左隻には北前船が敦賀に入港するところから荷揚げ作業の様子と京都の紅花問屋の店先の様子が描かれている。いずれの場面も人々の様子が見事に描かれている。左隻の、大阪の港に入港する船団中央の帆印にある㊡長谷川家によって、平成3年（1991年）山形市の山寺芭蕉記念館に寄贈されたもの。大きさは、それぞれ高さ156.5cm、幅366.0cm。

⑪花笠まつり（はながさ）

山形市　天童市　尾花沢市

毎年、威勢のいい掛け声と花笠太鼓の勇壮な音色の中、山車を先頭にあでやかな衣装の踊り手が花笠を手に「ヤッショー、マカショー」の花笠音頭に合わせて豪華な群舞を繰り広げる山形の夏まつり。踊り手が持つ花笠は、紅餅を筵に広げて干す様子を表わし、踊り手が練り歩くさまは一面の紅花畑が広がる光景を再現している。花笠踊り発祥地、尾花沢市では100年もの間伝承されてきており、勢いのある笠まわしが特徴。山形市の目抜き通りの花笠パレードは昭和38年（1963年）に蔵王夏まつりから始まった。また、将棋駒の里天童市では温泉街通りのパレードの他、各旅館でも趣向を凝らした花笠イベントがある。サクランボ狩り、芋煮会に並ぶ山形観光イベントのシンボルである。

⑫紅花まつり

山形市　天童市　中山町　河北町　白鷹町

毎年7月上旬、鮮やかな緑の山間の里に赤黄色に咲きそろう紅花畑を会場に開催される。江戸時代に盛んに行われていた紅花の花摘みや紅餅つくり、紅花染めなどが体験できる初夏のまつり。紅花のほか郷土芸能も鑑賞でき、写真撮影会とフォトコンテスト、紅花のプレゼントや即売など多彩なイベントやコーナーがある。県外からの観光客に体験型観光を通じて、山形の歴史と文化を伝え都市と農村の交流を図ることを目的に始まった。アニメ映画「おもひでぽろぽろ」のモデルとなった山形市高瀬地区は、30アールの広大な土地に約24,000本の紅花が咲き誇る。中山町旧柏倉九左衛門家周辺や天童市上貫津地区、河北町紅花資料館、白鷹町滝野交流館などでも毎年7月上旬に行われる。